

大津皇子の恋

—相聞歌の伝承—

内田 曉 郎

(一)

言うまでもなく作品解釈の態度はどこまでもあるがまゝで正当でなければならぬ。小稿ももとよりその意図に出ているわけであるが、もしも、ほしいまゝな態度と見えるふしがあるならば、私の未熟として御叱正を賜わらなければならぬ。

こゝに取り上げるのは万葉集卷二相聞の部に収められた、石川郎女（石川女郎）をめぐる大津皇子関係の歌である。それらを正當に理解するための要件としてその作歌事情や作意（作中人物の心や行動）を考慮しなければならないが、これらの歌でそれを試みようとするばついに「伝承」の問題につきあたらざるを得ない。ある歌が誰かによつて作られ、それが伝承されていくうちにもとの作歌事情が忘れられて、連想から新たに作歌事情と思われるものが想定され、一種説話的な

享受のしかたを受けるようになることがあるのではないか。今問題にする歌群には大津皇子の謀叛事件に連なる悲劇的な恋の様相がうかがわれるが、そこにはそうした享受者の創造にかゝるものがかかなり含まれているのではないかと思う。

大津皇子の刑死された持統朝初頭からこの歌群を含む卷二原本の編纂された奈良朝初頭までには、二十年以上の年月が流れており、その間にこれらの歌が説話的変貌を遂げつゝ伝承されていったことが想像される。一体に卷一、二にはほかにいくつか恋物語的歌群ともいふべきものがあり、その中には作歌事情そのものがすでに恋物語的であるものもあると同時に、また一方こゝに述べるような伝承間の説話的成長を含むものもあったのではなからうか。それらは語部ないし語部めく者の伝承した所であろうとされる人もあるほどである（注一）。今、問題とする歌群を掲げよう。

○

大津皇子贈石川郎女

御歌一首

あしひきの山のしづくに妹待つと吾立ち濡れぬ山のしづく
に(二・一〇七)

石川郎女奉和歌一首

吾を待つと君が濡れけむあしひきの山のしづくにならまし
ものを(二・一〇八)

大津皇子竊婚石川女郎

時津守連通占露其事一皇

子御作歌一首

大船の津守の占に告らむとはまさしに知りてわが二人寝し

(二・一〇九)

日並皇子尊贈石川女郎

御歌一首女郎字曰大名兒也

大名兒ををちかた野辺にける草の束の間も吾忘れめや

(二・一一〇)

○

これらの歌を持統天皇の御代の標下にこうした順序で並べ掲げたのは卷二原本の編者であろう。編纂の資料本にすでにこうした順序で並べたかどうかはわからないけれども、この順序や形が編者自身の享受におけるものであったことは確かである。ところで持統天皇の御代の標下に掲げたのは、これらが天武天皇崩御の朱鳥元年九月九日から大津皇子刑死の十月三日に至るわずか一箇月足らずの間に作られたも

のという意味ではなく、大津皇子の刑死が天武天皇崩御の後、即ち持統治下の時期に属していたからで、従って何らかの意味でその刑死事件にまつわる歌だと理解したためである(注二)。その理解でこれらの歌を受取るとき、大津皇子が恋歌を贈答した石川郎女(石川女郎)はまた皇太子日並皇子尊からも恋歌を贈られていた女性であり、大津皇子は通ずべからざる女性にひそかに通じたわけであって、これが津守連通の卜占で暴露されるに及んで大津皇子の悲痛な一種挑戟的でさえある詠歌となった、と見られるのである。この穏やかならざる事態はやがて大津謀叛の原因ともなりかねず、こゝに、あたかも壬申の乱のかけに額田王があったように、大津謀叛のかけに石川郎女という女性があったのだという享受のしかたが成立するのである。「郎女」と「女郎」とは通用したらしいから、こゝに出てくる石川郎女と石川女郎とが同一人と見なされることは容易である。これが編者たちの享受のしかたであったと思われる。われ／＼としてもこれらを相互に見わたして正当に理解しようとするかという解釈になっている。注釈書の多くがそう解しているのももつともなことである。今便宜上、窪田空穂氏の「評釈」を引いてみよう。

「一一〇」によつてみると、郎女は当時日並皇子尊の召人となり、畏くも尊の愛を蒙つてゐたのであるが、その間にあつて郎女は、他の三首によると、大津皇子と密会しようとし、遂にひそかに相逢ふといふ關係となり、それが問題となつて、津守連の占を待つまでに至つたので

ある。この占の事は、日並皇子尊によってなされたことと思はれる。これは一人の郎女を中にして最も尊貴なる二皇子の愛の争をなされたといふ事で、この四首を単に歌といふ上から見ると、まさしく歌物語である云々。

この解釈は、編纂当時のこれらに対する享受のしかたが物語的ないし説話的であつたことをも指摘していて興味が深い。

ところが、このような事情がはたしてこれらの歌の制作当時の事情そのまゝであつたらうか。それを考える手がかりとして挙げたいのは「妹待つと吾立ち濡れぬ山のしづくに」の解釈如何ということである。皇子はなぜ山のあたりで女を待ったのであらうか。前記「評釈」などはそれを密会しようとしたからだと説明する。自家を離れた山のあたりに出かけて女を待つとはいかにも人目を避けて密会しようとしたもののようであり、また下の「大津皇子竊婚石川女郎」という題詞に照らすとそうした密会を約束することもあつたに違いないと感ぜられる。しかし、説話中の皇子ならいざ知らず、現実に皇子ともある人が実際に山かげあたりで女を待ち合わせようとも思われず、またかりに実際そうであつたとしても、郎女の答歌を見れば、郎女は約束を違えたばかりか、皇子のこの訴えに対して「あなたが立ち濡れたというそのしづくになつてあなたに触れたい」と答えるとは、あまりにも人をからかったコケツトリイである。贈答の恋歌が歌垣に由来する攻撃的発想をもつものであることは言うまでもないが、そこで

は贈歌も答歌もいづれ劣らじと相手をへこます姿勢をとつて笑いかもしているものである。それがこの場合郎女の歌にだけ一方的に見られる姿勢であるのは不思議である。これは、その作歌事情に実際「密会の約束」があつたと見る所から来る不調和なのではなからうか。もっと別な作歌事情を考へるべき所だと思ふ。さればといつて密会説をとらない注釈書で、皇子が山のあたりに出かけて女を待つわけを説明したものはいきおい下の題詞の「竊婚云々」に照らして密会説をとるようになりやすい（注三）。

こゝに思い合はされるのは、土屋文明氏の「私注」の解釈である。氏は日並皇子尊が石川女郎に贈つた歌に注してこう言う。

大津皇子の謀反は皇太子に対してなされたものと記されてゐるが、茲に同一女性に対する恋歌を並べて居るのを其の事にまで関連させるにはあたらない。

こういう解釈に立てば、皇子が山のあたりに出かけて女を待つという歌も、謀反事件に発展するような密会を想定しなくてすむのかもしれない。おそらく謀反事件に結びつける解釈があまりに説話的劇的な作歌事情を想定させることになるためにこうした発言も現われるのであらう。そこには土屋氏のアララギ的作歌観もはたらいといふけれども、また一面傾聴すべきふしもある。後人の心理は大津皇子の悲劇的運命からとかくその作歌をもそうしたもの結びつけて考えやす

いが、現実の作歌事情はもっと日常的であつたかもしれないのである。こうした意味で、現実の作歌事情として密会を想定するのが適当かどうかを吟味する必要がある。そのためにはこの贈答歌を謀叛事件ないし密会説から一旦解放し、歌群全体の関連から切り離して、単独にその作歌事情を追求してみなければならぬ。

(二)

では、大津皇子と石川郎女との贈答歌を単独に取り上げて考察した場合どんな作歌事情が想定されるであろうか。こゝではまず皇子の贈歌から始めたい。

この歌で問題になるのは恋歌の通例に反して男が女を待っていること、及び待つ場所が山かげのような所であることである。これらがいかにも密会を約束したもののように思わせもしたのである。そこで参考のために男が女を待つことを歌った例を万葉集中から拾ってみる。

(1) 秋山の黄葉あはれびうらぶれて入りにし妹は待つに來ま

さず (七・一四〇九)

(2) 梅の花咲きて散りなば吾妹子を來むか來じかとわが松の

木ぞ (十・一九二二)

(3) 道のべの草を冬野に踏み枯らし吾立ち待つと妹に告げこ

そ (十一・二七七六)

(4) かくだにも妹を待ちなむさ夜ふけて出で來し月の傾くま

でに (十一・二八二〇)

(5) あしひきの山より出づる月待つと人には言ひて妹待つ吾を (十二・三〇〇二)

(6) 妹待つと御笠の山の山菅の止まずや恋ひむ命死なずは (十二・三〇六六)

(1) は挽歌、(2) は春相聞のうち松に寄せる歌、(3) は寄物陳思、(4) は問答のうちの問歌、(5)、(6) はいずれも寄物陳思、となつてゐる。注意すべきは、これらがみな作者未詳の伝承的な歌で、作歌事情というような個人的契機は明らかでなく、作意(作中人物の心や行動)から連想してかなり自由に作歌事情と思われるものを想定し得るものもあるということである。さてこれらの歌の作意はどうであろうか。

右のうち密会の相手を待つ歌と見ることができ、また見られてもいるものは(4)と(5)である。ところがこれは、密会の相手を待つものと見なくては絶対に解けないというような歌ではなく、むしろ密会のことは転義ではないかとさえ思われる。(4)はその答歌が「木の間より移ろふ月の影を惜しみたちもとほるにさ夜ふけにけり」(十一・二八二一)とあつて、おそく來た女の言いわけらしいから、これと合せて密会の場面と見られてもいるものであるが、この答歌はもと独立の月光觀賞詠らしく、答歌に擬せられたのは第二次的現象だつたと思われる。してみれば問歌の方もとは独立の歌で、わが家のあたりで女の來るのを待つとか、愛人の家のほとりに行つて、その出て來るのを待つとかする意味の歌と見てよい。(5)もわが家のあたりで女を待つ意味の歌と見ることができ

る。女が男の所へやって来ることも皆無ではなかったのである。現代でも女のよばいのある地方もあり、前掲(2)の歌も女の来るのを待つ歌である。また、

君が家にわが住坂の家路をも吾は忘れじ命死なずは

(四・五〇四、人麻呂の妻の歌)

における「君が家にわが住み」という序の言い懸けや、

紅の裾ひく道の中に置きて妾や通はむ君や来まさむ

(十一・二六五五)

などを見ても女の通いはあったようである。「住み」も完全な同居でなくて一時的滞在を意味し、「通い」とほとんど同義であった。しかも(5)においては、もと「君待つ吾を」であったものが伝承の間に「妹待つ吾を」と歌い替えられて男の歌になったらしいふしがある。

……さにつらふ君が名言はば色に出でて人知りぬべみあしひきの山より出づる月待つと人には言ひて君待つ吾を

(十三・三二六七)

という長歌の末尾が歌い替えられたと見るのである。長歌の末尾が独立しやういことは反歌成立の動機に鑑みても明らかであるし、また男女を入れかえて歌うことは伝承歌に例のあることである。

はしきやし会はぬ子ゆゑにいたづらに是川の瀬に裳の裾

濡らしつ (十一・二四二九)

はしきやし会はぬ君ゆゑにいたづらに此川の瀬に玉裳濡らしつ (十一・二七〇五)

の例だけ見てもおおよそは察せられよう。「是川」(氏は通用)も誤読されて「此川」となっている。しかも歌い替えの結果女が川を渡って会いに行く趣になっているではないか。おそらく伝承者が場に適応させようとする所から起こった現象であらう。例えば、

橘の蔭ふむ道のやちまたに物をぞ思ふ妹に会はずて

(二・一二五、三方沙弥)

という男の歌も、女が歌うと、

橘のもとに道ふみやちまたに物をぞ思ふ人に知らえず

(六・一〇二七、豊島采女)

となり、

月見れば国同じきを山へなりうるはし妹はへなりたるかも (十一・二四二〇、人麻呂歌集)

という、女を思う歌も、男友達を思う環境の中で書きとめられると、

月見れば同じ国なり山こそは君があたりを隔てたりけれ

(二十・四〇七二、大伴池主の大伴家持あて書状の中に

「古人云」として引用したもの)

となつていふようなものである。(5)の歌もそのようにしてできたものではないかと思われるから、何も密会を原義と見るには及ばない。

さて(4)以外の歌では、密会の相手を持つ意味に解されているものはない。すると密会説を絶対的解釈とする歌はこれらの中には一つもないことになり、われ／＼はもはやそうし

た関心から離れて、大津皇子の贈歌の解釈に直接示唆を与え
る歌をこれらの中から選び出すべきである。こゝに(1)の歌が
浮かび上がって来る。これも待つ場所は山のあたりとおぼし
く、秋山に入つたまゝ帰らぬ女を待つことが歌われている。
山に入つたというのは死を意味し、死者入山の観念に立つた
表現である。人麻呂の歌にも、

秋山の黄葉を茂みまどひぬる妹を求めむ山道知らずも

(二・二〇八)

とか、

……大鳥の羽易の山にわが恋ふる妹はいますと人の言へ

ば岩根さくみてなづみ来し……(二・二一〇)

と歌われている。こうした発想では、死もなお生の連続の相
においてとらえられ、死者は愛する者を残して山に入り、ま
たは山を越えて遠く異郷に旅立つたものと観ぜられている。
これは一部相聞歌の発想と共通する。相手が男であっても女
であっても同じことである。

君が行きけ長くなりぬ山たづね迎へか行かむ待ちにか待

たむ(二・八五)

は相聞の部に収められ、磐姫皇后の作と伝えられているが、
発想は挽歌のそれである。この発想についてはすでに故折口
信夫博士のすぐれた論考がある。たゞ「恋ひ」を「魂乞ひ」
と説明された語源論は上代特殊仮名遣から見て訂正を要する
のではあるが(注四)。こう見てくると、悲別歌と標示された
中の、

くもり夜のたどきも知らぬ山越えています君をばいつと
か待たむ(十二・三一八六)

や、東歌の、

わが背子を大和へやりてまつしたす足柄山の杉の木の間

か(十四・三三六三)

などに「山」が出る所以も諒解される。「まつしたす」の解
釈には困難があるが、「待ちし立つ」の転訛で「待ち」を
「松」に言い懸けた表現と見る説に従いたい(注五)。足柄
山・足柄坂は、常陸・武蔵・相模などの東国人にとつては、
大和へ向かう道における厳しい境界であり、愛する人と自分
とを隔てる関門であった。ひとたびそれを越えて大和へ徴集
されていった夫たちはふたたび生きて帰ってくるかどうか。
妻たちはその山に「待ちし立つ」わが身をそのまゝその松
の木に移して「松し立つ」と象徴化する。死別と離別とを問
わず、待つ場所が山に關係しているのはこういうところに理
由があった。

大津皇子が山のしづくに立ち濡れながら相手を待ったとい
うのも、実は右のような発想ではなかったか。皇子は今遠く
他郷にある石川郎女を待ちわびている。山は彼女が去って行
った関門であり、その帰りを待ちわびる作者がむなしくそこ
に出て立ちつくす趣である。郎女は「大津皇子宮侍」(二二
九の歌の題詞)であつたともいい、その出身地が河内の石川
郡だったらしいから、そうした離別の時期もあつたことと想
像される。その郎女にこうした恋い待つ意味の歌を贈つたの

である。しかしこゝに注意すべきは作意と作歌事情との区別である。作意は山に待つとあつてもそれは発想形式上そうなっているのみで、現実には皇子が山まで出かけたかどうかは保証の限りでない。もしそうであるなら、この歌は一種當意即妙の誇張によつて相手を挑発する贈答歌の方式をふんでおり、二人の恋というのもそうした機智的親和關係の上に形象されたものとなるのである。

(三)

大津皇子の贈歌が遠く離れている愛人待ちわびる心で贈られたものであることは右に述べた。すると、石川郎女の答歌もまた相離れた境遇のもとに皇子を恋い思う心で答え送ったものでなければならぬが、そう見ることは可能であるか。こゝに同じ発想の歌を求めて調べてみようと思う。

(甲) 類

(1) 吾妹子に恋ひつつあらずは秋萩の咲きて散りぬる花ならましを (二・一二〇、弓削皇子思紀皇女二御歌四首のうち)

(乙) 類

(2) 世の中は恋しげしるやかくしあらば梅の花にもならましものを (五・八一九、梅花歌三十二首のうち、豊後守大伴大夫)

(3) かくばかり恋ひつつあらずは岩木にもならましものを物思はずして (四・七二二、大伴家持)

(丙) 類

(4) 後れる恋ひつつあらずは紀の国の妹背の山にあらましのを (四・五四四、神龜元年甲子冬十月幸紀伊國之時為贈從駕人二所詠娘子二笠朝臣金村作歌一首并短歌のうちの反歌)

(5) 後れる長恋せずは御園生の梅の花にもならましものを (五・八六四、奉和諸人梅花歌二首、吉田連宣)

(6) よそにゐて恋ひつつあらずは君が家の池に住むとふ鴨にあらましを (四・七二六、獻三天皇歌二首のうち、大伴坂上郎女在春日里作也)

(丁) 類

(7) たまきはる命に向かひ恋ひむゆは君が御船の櫂からにもが (八・一四五九、天平十五年癸酉春閏三月笠朝臣金村贈入唐使歌一首并短歌のうちの反歌)

(8) 家にして恋ひつつあらずは汝がはける大刀になりてもいはひてしかも (二十・四三四七、防人国造日下部使主三中之父歌)

右は「……になりたい」という発想の歌のうち代表的なもの、作歌事情の明らかなものを選んであげた。作意には少しづつ違いがあるが、すべて恋の思ひの苦しさを訴え、それから逃れたいと望む歌である。そのうち(甲)は秋萩の咲いてやがて散ってしまう、そういう花になった方がましだと歌って、美的感覚のあわれさの中に死への願いを暗示したもので

かくばかり恋ひつつあらずは高山の磐根し枕きて死なましものを(二・八五)

など一連の歌の作意に通うものであるが、(乙)になると、恋の苦しさを逃れようとする点は同じでも「物思はずして」とも言っているように、無心な動植物などになって思いを忘れたいと言い、何かになるという方へ気持が進んでいる。

(丙)ではそうした対象物が遠く離れた相手の身辺の物となっているところに特色がある。これらはみな作歌事情の明らかな歌で、親愛な関係にある相手を遠く離れた者のよんだものであることが注意される。即ち(4)では從駕の夫の旅先である紀伊の妹背山に着目し、それでありたいと願っており、妹と背の山ならば共に近くにたぐい居ることができるといふ機智的連想に立っている。(5)は太宰府にある帥大伴旅人の書状に答えて都から吉田連宜が送ったもので、御園生の梅になって君と共にありその賞玩を得たいというのであり、(6)もせめて君の家に住む鴨となっておそばにありたい、というのである。このような相離れて恋うる歌の一つと見られるものに、

かくばかり恋ひつつあらずは朝に日に妹が踏むらむ地ならましを(十一・二六九三)

がある。作歌事情のわからない伝承的な歌であるが、恋は会えない所につのる心持であり、これもそういう作意と見られる。しかも「朝に日に妹が踏むらむ地ならましを」とはまことに機智的官能的表現といわなければならない。こう見てくると、今問題にしようとする石川郎女の歌もまったくこれと

同じ作意のものと考えられてくる。そして郎女の「しづく」になりたいという着想の方がもっと甘美な官能性に充ちているのは「しづく」がより直接に相手の膚にしみていくものであるからだと思われるのである。勿論作歌の場を異にする(丁)のように惜別の歌ともなり得る性質のものではあるが、大津皇子の贈歌と合わせ考えれば、このように相離れて恋うる心を作意とした歌であることが確かである。相離れた者の間に贈答された歌の例としては、天智天皇と鏡王女との贈答(二・九一―九二)、弓削皇子と額田王との贈答(二・一一一―一一二)があり、また、

(天武) 天皇賜藤原夫人

御歌一首

わが里に大雪降り大原の古りにし里に降らまは後

(二・一〇三)

藤原夫人奉和歌一首

わが丘のおかみに言ひて降らしめし雪のくだけしそこに散りけむ

がある。最後の贈答歌は恋歌ではないが互いに相手をやりこめようとする機智的姿勢の中にほほえましい融和の關係を示している。石川郎女が「山のしづくにならましものを」と歌ったときにも、恋の切情を訴えるという擬態にもとづく機智的即興があった。いわんや、前章で触れたように、大津皇子が現実には山に出かけないで「われ立ち濡れぬ山のしづくに」と歌い送り一種誇張めいた誘いかけをしたものとすれば、郎

女の「山のしづくにならましものを」も「お生憎さま」といわんばかりの一種揶揄めいた機智でこれをはねかえすものを含んで来る。なぜならば、山のあたりに行かなければそうしたしづくに濡れるはずもなく、従つてそのしづくになつて御身に触れるなどということも皇子自身のせいで成り立たなくなるからである。このような贈答はもとより右の天武天皇と藤原夫人との贈答歌のように根底に親和關係を含む「かけあい」なのであった。

かくして、大津皇子と石川郎女との贈答歌は、相離れた所で贈答された恋歌であつた。しかも誇張や機智を含む「かけあい」として当時の貴族生活における社交的雰囲気を支えられたものであつたと考える方が、より適切なのではないかと思う。

(四)

大津皇子と石川郎女との贈答歌を単独に取り上げてその作歌事情を推定するとおよそ右の通りになつた。では、その次に掲げられた二首の歌についてはどうであらうか。

まず初めの歌には、大津皇子がひそかに石川女郎と通じたのを占い露わされたときによんだものと明記した題詞がある。これを信ずる限り、大津皇子密通の事実は否定すべくもない。しかしそれがなぜ密通として重大視されるのか、それを具体的に説明するような事実はこの題詞には示されていない。そこで、次に日並皇子尊が石川女郎に恋歌を贈つた事実

のあることから、この皇子尊の目を憚る密通だったのであらうという想像が湧くのであるが、これは必ずしも現実に即した推察ではないのである。恋歌が一種の社交歌として贈答されたこともある当時にあつては、恋歌を贈つたことが必ずしも婚姻關係を結んだことにはならないからである。婚姻關係のある場合には題詞に「娉」の字などを用いることがあるが(二・九三以下に散見する贈答歌の題詞)、こゝにはそれもなく、また皇子尊の召人となつていたのならはそのことを示すような表現がありそうなものだが(二・一一六の題詞に「但馬皇女在高市皇子宮時竊接穂積皇子云々」とある)、それもないのである。してみれば大津皇子の密通事件を専ら日並皇子尊に關係づけて究明するのはあたらないであらう。これもできるだけ単独に取りあげて考察してみることがある。そこで万葉集中に今の場合と同様「竊」の字をもつて表現された恋愛事件を求めて参考にしてみよう。右に触れた但馬皇女の例は除いておく。

(1) 右一首、平群文屋朝臣益人伝云、昔聞(この「聞」は「多」の誤―吉永登氏―)紀皇女竊嫁高安王被責之時、御作此歌。但高安王左降任之伊与国守也。(二・三〇九八の左注)

(2) 昔者有_二壯士与_二美女_一也。_{姓名}不_レ告_二親_一竊_レ為_二交_一接_二。於時娘子之意欲親令_レ知。因作_二歌詠_一送_二与其夫_一、歌曰、

(十六・三八〇二の題詞)

(3) 右伝云、時有_二女子_一、不_レ知_二父母_一竊_レ接_二壯士_一也。壯士

悚^ニ惕^ニ其^ノ親^ヲ呵^レ嘖^ニ、稍有^ニ猶^ノ予^ノ之意^一。因^レ此娘子裁^ニ作斯謂^一賜^ニ与^ニ其夫^一也。(十六・三八〇六の左注)

このほか「竊」の文字こそ使っていないがその事を意味する恋愛事件では、

(4) 右安貴王娶^ニ因幡八上采女^一。係念極甚、愛情尤盛。於時勅断^ニ不敬之罪^一退^ニ却本郷^一焉。于是王意悼恒、聊作^ニ此歌^一也。(四・五三四一五三五の左注)

(5) 石上乙麻呂卿配^ニ土左国^一之時歌(六・一〇一九一〇二二の題詞)

(6) 中臣朝臣宅守娶^ニ藏部女孺狭野茅上娘子^一之時、勅断^ニ流罪^一配^ニ越前国^一也。於是夫婦相^ニ嘆^ニ易^ニ別難^一、会^ニ各陳^ニ慟情^一贈答歌六十三首(十五・三七二三以下に對する目錄の題詞)

などがある。(5)の石上乙麻呂は久米連若女(藤原百川の母)と密通したかどで配流されたものである。一体これらは誰の目を憚らなければならぬ恋愛だったのであろうか。(2)(3)の例は明らかに親の目を忍んだ恋であり、伝承的恋歌に附随して説かれた説話で、民間の忍び妻問婚の習俗を反映している。しかしその他の例はみな宮廷社会における情事であって、少しく事情を異にし、いわば勅断に触れた悲恋ともいうべきものである。神聖なるべき天皇の權威をおかすとか、宮廷社会の掟を破るとかいう意味の恋愛である。采女は神たる天皇に仕える巫女としてタブーのついた存在であったことは周知のところ、また石上乙麻呂の通じた久米若女も夫なきあと采女

の資格で奉仕していたらしいと言われている。また、文武朝ごろになると宮廷内の男女の風紀がひどく乱れ「男女別なく昼夜相会す」るありさまとなり、これを非難する意味の詔が出されている(注六)。そうした宗教的タブーや宮廷秩序維持の要求は結局天皇支配の權威を確保するためのものであるが、それに憚りつゝもなお悲しい恋愛は生まれていたのである。顧みて大津皇子の「竊」かな恋も、くわしい事情はわからないにしても、やはりそうした性質のものではなかったろうか。日並皇子尊との關係を考慮に入れるまでもなく、大津皇子とその女性とが通じ合うことが直ちに勅断に触れるとか、そこまで行かなくとも天皇の權威を汚すとかいった性質のものであったろう。それを占い露わされた時の大津皇子の歌は、そうした禁断の恋にさえ引かれずにはいらなかった者の悲痛な叫びであった。

以上は大津皇子の密通事件を日並皇子尊のことと切り離して考察した所である。切り離れた理由は日並皇子尊の恋歌が必ずしも石川女郎との婚姻關係を証明するものではないという点にあった。しかし、厳密に言えばこの前提は絶対的なものではない。恋歌を贈っているからには單なる社交的意義を超えた交渉があったかもしれないという可能性が残っているのである。もしそういう交渉があったとすれば大津皇子の恋は日並皇子尊の目を忍んだ密通だったことになる。そのつもりで大津皇子の歌を見るといかにも不敵なまでの挑戦的口吻が聞かれるのであり、それこそ日並皇子尊との対立關係を表わ

書紀

(1) 大碓命 (景行紀二年)

天皇が美濃国造神骨の娘、兄遠子弟遠子を美人と聞いて、大碓命を遣してその容姿を觀察させたところ、命はそれに「密通」して復命しなかった。ので天皇は恨まれた。

(2) 準別皇子 (仁徳紀四十年)

(1) 天皇が雌鳥皇女を納れて妃としようとして準別皇子を媒として遣したところ「密かに親娶け」て久しく復命しなかった。

(2) 天皇はその謀叛の氣配を察し、これを追い討つて遂に殺させる。

(3) 住吉仲皇子 (履中即位前記)

(1) 皇太子が羽田矢代宿禰の娘黒媛を妃としようとして納采も終つてから住吉仲皇子を遣して吉日を告げさせたところ、仲皇子は太子の名を冒してこれを「奸」した。

古事記

(1) 大碓命 (景行記)

天皇が三野国造の祖、大根王の娘、兄比売・弟比売を美人と聞いて大碓命を遣して召し上げようとしたところ、命は自らそれと婚し、他の女を比売と称して奉つた。これがもとになり、命は結局、弟の小碓命につかみひしがれて死んだ。

(2) 速総別王 (仁徳記)

(1) 天皇が女鳥王を乞うとき速総別王を媒としたところ、女鳥王の誘惑でこれと婚して復奏しなかった。

(2) 天皇はその謀叛の氣配を察し、軍を起して追い討つ。

(3) 墨江中王 (履中記)

(1) 「該当記事ナシ」

すものではないかとの推測も成り立つのである。こうして追求は堂々めぐりに陥つてしまふ。これの解決として私は「伝承」の観点を持ちこんでみたいと思う。作品の伝承にあつては伝承者や享受者の意識が作品や作歌事情の中に滲透してき、時には題詞や歌詞が変更されることもあるが、そうした変更の十分でない所が題詞や歌詞のはしばしに残ると、あるいはもとの作歌事情が見えかくれし、あるいはそれが隠れてしまふという状態になるのではなからうか。今の場合、大津皇子の密通が直ちに勅勘に触れるような性質のものと見えたのはもとの作歌事情に近いものであり、日並皇子尊の目を忍ぶ密通と見えたのは伝承間の享受意識が生んだ結果だと思われる。それを明らかにするために、次には角度を変えて伝承の面から皇子たる人の密通事件を考えてみなければならぬ。

(五)

前の大津・石川の贈答歌ではもとの作歌事情をうかゞわせる要素がかなりの程度まで残っていたが、この二首の歌の場合になるとそうした要素は相当深く伝承のヴェールに隠されてきているようである。こゝではそうした伝承の面から皇子の密通事件を取りあげて今の場合の考察に資したい。そこで今、日本書紀に「密通」「密親娶」「竊通」「奸」等の文字もをって記された皇子密通の例を求めてみる。たゞし斎宮を「奸」した事件は略す。古事記と対照して掲げよう。

(四)それが露見すると皇子は皇太子を殺そうとして叛乱を起こし結局は殺されてしまふ運命になる。

(4)木梨輕太子

(允恭紀二十四年及
び安康即位前紀)

○太子は同母妹輕大郎女と「竊かに通じ」それが卜占をきつかけに公になったが、太子は儲君たるの故で罪に問われず大郎女のみ伊予に流された。

○太子は婦女に淫乱なため人々の反目する所となり、遂に叛乱を起こしたが、攻められて結局自殺した。

(5)鮪 臣 (武烈即位前紀)

太子が物部鹿鹿火大連の娘、影媛を召そうとして媒人を遣して会うことを約束させたところ、すでに真鳥大臣の子鮪と「奸」けていた媛は海柘榴市の歌垣で会うことを約した。太子がそこに行くとやがて現われた鮪のために歌争いとなり、その結果太子は鮪の無礼を怒って兵を起して誅伐する。

(四)天皇がもと難波宮に居られた時、墨江中王は天皇を殺そうとして宮殿を焼き叛乱を起こして、結局殺される運命になる。

(4)木梨輕太子 (允恭紀)

太子は同母妹輕大郎女と通じて人々の反目するところとなり、叛乱の未捕えられて伊予に流された。そして太子のあとを恋い追って来た大郎女(衣通王)と共に自殺した。

(5)志 毘 臣 (清寧記)

歌垣の場で袁祁命が婚しようとした美人(大魚)の手を志毘が横合から出て奪ったので歌争いとなり、命は遂に兵を起こしてこれを伐つ。

(1)(2)は天皇妃の予定者に通じたもの、(3)(書紀のみ)は皇太子妃の予定者に通じたもの、(4)は皇太子自身が同母妹に通じたものである。(5)は臣下の密通事件であるが参考のために加えたもので後に触れる所がある。さてこれらの中には、その密通事件が叛乱にまで発展したと説いているものがある。(2)は記紀ともにそう説き、(3)は書紀の方で、(4)は古事記の方で、そう説いている。しかし全部のものがそういう説きかたになつてはいない所を見ると、密通説話はもと独立したもので、時に叛乱説話がこれに加えられることもあったのであろう。叛乱が常に密通事件に端を発しているわけではない。狭穗彦王(沙本毘古)・忍熊王・大山守命・眉輪王(目弱王)などの叛乱も、記紀ともに密通事件のあったことを記していないのである。それでは独立に語られることもあったらしい密通説話の根型は何か。それは、(1)(2)などに「復命しない云々」とある所から推して、他部族に出した使者が帰ってこないという話の型ではなかつたらうか。即ち神代紀(神代記)に、天穗日命(天菩比神)が葦原の中つ国に言向けに遣されたが大己貴命(大國主神)に媚びついて三年に至るまで復命しなかつたという説話に見られるものである。天稚彦(天若日子)説話も同じ型に従っているが、そこでは下照姫と婚して「吾また葦原の中つ国を馭めむ」「その国を得む」と思う心を抱くことになつていて、いさゝか密通や謀叛の話に結びつきやすい要素を生じている。ともあれ、言向けの使者が帰って来ないという話には、大和朝廷の草創期、他部族

の統合を進めつゝあつた時代の記憶が残つていると思う。國家統一が軌道に乗つたころ、諸豪族を馴致吸収する諸動向の中で天皇のそれら豪族に対する婚姻の結合も進捗することになつたであろう。言向けの使者は、こゝに至つて、婚姻の媒人としての使者に変形する。そういう媒人たる使者が先方の女性に通じて復命しない、というのがこゝに見られる密通事件なのである。こう見てくると、密通説話の型は本来使者たる皇子がその天皇妃予定者にひそかに通じて復命しないという形であり、時にはそれにその皇子叛乱の説話が附随することもあつたのだと思われる。皇太子妃予定者との密通というのはこうした説話の本来の形ではなかつたのであろう。そうした形のは前掲の例でも(3)の書紀説話のみである。これは書紀の説話態度に特別なものがあつて皇太子の地位を天皇同様に重大視しようとしたからではなからうか。その態度はあたかも(4)における書紀説話にも見えており、同母妹との密通という忌むべき大事件も皇太子なるが故に罪することを得ずとして女の方のみを流罪にし、古事記説話と著しく違つたものになつてゐるのである。これは皇嗣問題に不安のあつた書紀編纂当時（聖武天皇の皇太子時代）の政情から行われた説話改変であつたと説明されている（注七）。こうしてみると、このような皇太子妃予定者との密通説話の型は、奈良時代初期に生じた変型だつたと思われる。(5)における書紀説話もそうした皇太子重大視の傾向を帯び、古事記説話に見られる妻争い形式よりも複雑に変形している。

さて以上のように考えてきて、大津皇子の場合に立ち戻ると、次のようなことが言えるのではなからうか。大津皇子の密通事件はもと天皇妃予定者のごとき女性に対する密通事件、少なくとも天皇の權威に対して憚らねばならぬような密通事件として語られていた。これは前章に述べた第一の推定とも合致している。それが、書紀編纂の進んでいた奈良朝初期、つまり万葉集巻二原本の編纂されたころになると、皇太子の地位を重大視する考えから皇太子妃予定者との密通を問題にするような説話型が生じ、大津皇子の密通事件もそうした種類のものと理解されるようになってきた。あたかも前掲(3)における書紀説話の場合と相似たものに解されたわけである。もとよりそうした解釈に契機を与えたものは皇太子日並皇子尊が石川女郎に恋歌を贈つたという事実である。この事實は、彼が石川女郎を恋し、これと婚しようと思つてゐるのだと考えさせやすかつた。大津皇子は不敵にもその石川女郎とひそかに通じてしまつたのであり、それは皇太子たる人に対してなすまじきふるまいであつた。これがきっかけとなり、やがてあの皇太子日並皇子尊に対する謀叛事件も起こるに至つたものであろう。ほゞこういった説話的享受のしかたが生じたものと思う。

もと／＼この題詞が語る大津皇子密通の伝えはいくぶんの説話性を帯びていた。密通が卜占によつて露見するという発想は前掲(4)の書紀説話にも見えていたし、また民間における次のごとき伝承歌、

ももさかの船かづき入るる八占さし母は問ふともその名は告らじ(十一・二四〇七)

武蔵野に占へ肩やきまさでも告らぬ君が名占に出にけり(十四・三三七四)

おふしもこのもと山のましばにも告らぬ妹が名かたに出でむかも(十四・三四八八)

などが思わせる説話の世界を基礎とした伝えとも見えるからである。現実の事情としては、津守連通は秘密探偵の役割を果たしつつあった占星台の役人であり、その卜占による密通暴露は卜占の信仰心理を逆用した陰険な大津皇子排斥の手段であったが(注八)、奈良朝初期における伝承としては、当時隆々たる名声を博しつつあった津守連通が若くしてすでに卜占の神秘的威力を発揮した話として伝えられ、その中に大津皇子の歌も語り含められていた、といったようなものではないか。こうした説話性が発展して日並皇子尊の歌をもその伝承の中に包みこみ、皇太子の愛人に対する大津皇子のあるまじき密通、さらには謀叛へという、かの書紀説話の型に従った享受のしかたを生じたのであろう。

以上、あらまし大津皇子の密通事件をめぐる説話的享受について述べてきた。そしてこうした享受の態度からやがて大津・石川の贈答歌をも密会を約束したものであるかのように理解してきたのであろう。

(六)

やつと結論に來たようである。これらの歌群のうち大津・石川の贈答歌や日並皇子尊の石川女郎に贈った歌などは、恋歌といつてもその作歌事情にはかなり日常的な社交性が予想せられ、もと大津皇子謀叛のことと無関係であつたらしいが、大津皇子の密通露見に際してよんだという歌を契機として大津謀叛の話に結びつけられてきたと見られる。そしてそのような享受のしかたを促がした基礎に、密通がもたなつて皇太子に謀叛するという書紀説話型の発生があつたわけである。なおこれに関連して論ぜらるべき問題は残っている。例えば石川郎女(石川女郎)の実体とその伝承的形象など。しかし今はその余力を持たない。一応、以上をもって結論としたい。

(注)

一、伊藤博氏「磐姫皇后の歌―万葉集卷二の性格―」(國語學文第二八卷二号)

二、土屋文明氏「私注」には、相聞歌は制作年代が明らかでないので大津皇子の謀叛や歿年が持統天皇の御代であるところから編者が便宜こゝに収めたと説いてあるが、それならばむしろ天武天皇の御代の所に置くのが自然である。大津皇子の死は天武崩御の後一箇月も経ていないからである。謀叛や歿年に合わせて持統の御代に置いたのはかえってこれらの歌がその刑死にまつわるものと考えられたことを示しているよう。

三、折口信夫博士「万葉集の恋歌」(全集第九卷)で密会説を否定しているのは興味がある。ただし、博士は妻問いの歌と

見、皇子が郎女の家の前で郎女の出で来るのを待っているうち、その丘陵の木々から落ちるしずくに濡れたので、翌朝この歌を贈ったとされる。密会説を否定してまた別の説話的解釈を立てられたわけだが、贈った歌がまじめなのに対して答えた歌がほいままな言いかたになっていることは密会説と同様である。もつとも博士はそれが女歌の伝統とされるわけであるが、それにしても「山のしづくにぬれた」という表現には誇張があるだろうと、含み多い説明をされている。

四、折口信夫博士「相聞歌」（全集第九巻）

五、稲田浩二氏「まつしたす考」（未発表）は、東国万葉語の同行転訛の中でチ↓ツの転訛が最も多いことから「待ち」↓「待つ」の転訛の可能性を認め、また「待つ」について東歌、防人歌に他に転訛例のないことから、これは一回的な文学的契機——「松」への言い懸け——によるものと考えている。また「立つ」↓「立す」の転訛は単純な音声現象と認め得るとしている。そして「松し立つ」の形象が「待ちし立つ」を超えてこの歌の前面に出ると説いている。

六、続日本紀、慶雲三年三月の詔。

七、吉永登氏「輕郎女から磐姫皇后へ」（「万葉—その異伝発生をめぐって」）

八、吉永登氏「万葉集」（「古典とその時代」シリーズのうち）など。

〔後記〕

要するに、もともと別個の作品が、伝承の間に互に関連のあるものとして一まとまりに考えられてきたらしいのである。こゝに見える石川郎女（石川女郎）も、もと同一人であるかどうかは疑わしい。石川郡から出た多くの石川郎女（石川女郎）があつたと考えることも可能である。例えば、大津皇子がひそかに婚したという石川女郎と、大津皇子の宮の侍であつた石川女郎とは同一人と言いがたい。一方は公然とは認められぬ間柄であり、他方は公認と認められた間柄だからである。それが作品の伝承間に一まとまりに考えられるにつれて同一人化して来たものであらう。斎藤清衛博士の談話によれば、昔、佐々木信綱博士はその講義の中で、大津皇子は志賀の大津に關係ある皇子として数人のそれを考え得ると述べられたよし。詳細は知り得ないが、興味ある話である。

——三四年六月——